2018年12月16日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　**「エレミヤ書：新しい契約」**

聖書箇所：エレミヤ31:27-34

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日の聖書箇所はエレミヤ書の31:27-34です。旧約聖書ではイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書が三大預言書と言われるものです。イザヤ書は北王国がアッシリヤに滅ぼされる頃の預言であり、エレミヤ書は南王国がバビロニアに滅ぼされる頃の預言です。エゼキエル書はエレミヤの後半からバビロン捕囚中の預言です。エゼキエル書は黙示と称し、終末的状況を幻として述べたものですが、イザヤ書、エレミヤ書は預言の中で、背景となっている歴史的状況に関する記述もあります。特に、エレミヤ書は南王国の申命記改革で有名なヨシヤ王の時代から、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、南王国最後のゼデキヤからバビロニアの総督ゲダリヤの所までの叙述があります。この時代はユダ王国はアッシリア、バビロニア、エジプトという大国に翻弄され、結局、アッシリアにとって代わって覇権を握ったバビロニアによってユダ王国は滅ぼされ、多くの民がバビロンにつれて行かれ、奴隷としての取り扱いを受けることになります。歴史を先取りして言えば、その強大な軍事力を誇ったバビロニアも東から勃興したメディア・ペルシャに敗北し。、イスラエルの地はペルシャの支配下に入ります。その王クロスは宗教的寛容策をとり、ユダヤ人のエルサレム帰還を許します。帰還したユダヤ人は神殿を再建し、律法を基礎としたユダヤ教を作って行きます。エレミヤ書はユダ王国の滅亡とバビロン捕囚という悲劇の現実の中で、第二の出エジプトとも言うべき、エルサレム帰還の希望を預言します。しかし、この預言は単にユダヤ人のエルサレム帰還にはとどまらず、ずっと将来を見据えたイスラエルの再興への希望を語るものです。本日の聖書箇所に登場する「新しい契約」もその希望のメッセージです。あまり安易に新約聖書と結びつけるのではなく、イスラエルの苦難の歴史のなかでどのような「新しい契約」の幻が与えられたのかを見てみたい、と思います。

　具体的内容に入る前にエレミヤの時代について概観しておきます。ヨシヤ王は8歳で王となりましたが20歳位の頃、大改革を始めます。その前のマナセ、アモンの両王が偶像礼拝を放任したことを改め、イスラエルの「主なる神」のみを認め、他の異教を排除する宗教改革を断行します。その時、宮の修理の最中に律法の書が再発見され、それが、宗教改革の基本となったとされています。申命記改革と称せられています。エルサレムにおける公的祭儀は「主なる神」への信仰によって確たるものとされたと思われますが、エルサレム外のところでは異教的慣行が色濃く残っていた、と想像されます。政治的・軍事的状況としては、ヨシア王はアッシリアの属国の地位にあったユダ王国を反アッシリア政策に転換します。当時、アッシリアは衰退の時期であり、むしろ、アッシリアからの独立宣言を一方的に行った、ということと思われます。その後、バビロニアが強大になりつつあり、これに対抗しようとしたエジプトは、アッシリアを支援すべく、イスラエルを通過し、ユーフラテス川の上流に行こうとしたところに、ヨシヤ王はこれに対抗し、軍を動かしたが敗北し、北イスラエルのメギドで戦死するという結果となります。エジプトからも独立を維持したい、と考えたのでしょう。

ヨシア王の死後はその子エホアハズが王となりますが、エジプトはこの王を北シリアのリブラに幽閉するとともに、ユダ王国に巨額の賠償金を課しました。そして遂に、エホアハズを王からはずし、ヨシヤ王のもう一人の子であるエホヤキムを王としました。エホアハズはエジプトに連れて行かれ、そこで死んだとされています。これでユダ王国は今度はエジプトの属国とされた訳です。エホアハズ、エホヤキムの両王とも宗教的には昔に戻り、列王記記者から「主の目の前に悪を行った」とされています。異教の神々を礼拝することが横行したということです。既に、アッシリアは滅びバビロニアの時代になっていましたが、バビロニアの王ネブカデネザルがカルケミシュの戦いでエジプト軍を破り、カナンの地はバビロニアの支配するところとなりました。エホヤキム王は、今度はバビロニアに従属することとなりましたが、その後、まもなくして、バビロニアに反旗を翻すことになります。エホヤキムの死後その子エホヤキンが王となったが、あてにしたエジプトは動かず、ネブカデネザルに勝てるはずもなく、降伏し、バビロンに連れて行かれました。第一次バビロン捕囚です。同時に多数の指導者階層の者がバビロンに連行されました。なお、エホヤキンは37年後、ネブカデネザルの後の王エビル・メロダクによって釈放され、王とともに食事をするまでに厚遇されます。エホヤキンのあとは叔父がゼデキヤとして王にさせられます。“謀反を企てないこと、エジプトに接近しないこと”を誓わされた、と言われています。捕囚の民には当時少年のエゼキエルも居たとされています。そのゼデキヤもしばらくしてからバビロニアに反抗します。王室には熱狂的な反バビロニア・親エジプト派が居たようです。ネブカデネザルはエルサレムを包囲し、2年間の包囲に飢え、ついに城壁が破られます。ゼデキヤは目の前で子供たちが虐殺され、本人は目をつぶされ、青銅の足枷をつけられバビロンに連れて行かれた、と記されています。この時も多くの財宝と人々がバビロンに連れて行かれます。第二次バビロン捕囚です。ゼデキヤのあとはネブカデネザルによって任命された総督ゲダルヤが支配します。彼はバビロニア王に従うことを勧めますが、王族のひとりであるイシュマエルによって暗殺されます。そしてそれに関与した人々はエジプトに亡命致します。おそらく、反バビロニア・親エジプト派が起こした事件でしょう。ゼデキヤ王を最後としてユダ王国は滅亡しました。総督ゲダルヤが暗殺された時にもイスラエルの人々が捕囚の目にあったようで、第三次バビロン捕囚と言われています。

このような混沌とした政治状況の中でエレミヤは預言しました。1:1でエレミヤは「アナトテにいた祭司のひとり、ヒルキヤの子」と言われています。エルサレムの北東にある小さな村です。しかし、しばしば王とも話をしていますから、それなりの地位にあった祭司の子であったと思われます。エレミヤ書はまずヨシヤ王の時代の預言から始まります。2-6章です。基本的には北王国イスラエルの民に対する預言です。強烈に罪を責めます。3:6-7をお読みします。主の言葉です。「あなたは、背信の女イスラエルが行ったことを見たか。彼女はすべての高い山の上、すべての茂った木の下に行って、そこで淫行を行った。/わたしは、彼女がすべてこれらのことをしたあとで、わたしに帰って来るだろうと思ったのに、帰らなかった。また裏切る女、妹のユダもこれを見た」とあります。あの宗教改革で有名なヨシヤ王の時代にこのような預言をしているのです。そして主なる神に立ち帰ることを何度も呼びかけます。4:2では、「あなたが真実と公義と正義とによって 『主は生きておられる』と誓うなら、 国々は主によって互いに祝福し合い、 主によって誇り合う」という平和（シャローム）が確立した神の国のイメージが語られます。ここで言われている「真実と公義と正義」は定型的な言い方で、平和が真の平和であるための条件です。6章では偽預言者が出てきます。6:13をみると「身分の低い者から高い者まで、 みな利得をむさぼり、 預言者から祭司に至るまで、 みな偽りを行っているからだ。/彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、 平安がないのに、 『平安だ、平安だ』と言っている」と言われています。真の平和が存在しないのに、偽預言者達は「平安」「平安」と言っている、と言うのです。「平安」と訳されているのは「平和」と同じ「shalo:m」です。「真実と公義と正義」が実現していないので偽の平和だと言っているのです。もっとも戦争の時ほど「真実と公義と正義」がないがしろにされる時はないので、戦争のない状態は「真の平和」を実現する最低条件とはいえるでしょう。

とにかく、大変厳しいヨシヤ王の時代のイスラエルへの裁きの預言に続いては、ヨシヤ王、エホアハズ王の次のエホヤキム王の時の預言です。やはり、イスラエルへの預言です。7-20章までです。8:5には「なぜ、この民エルサレムは、 背信者となり、背信を続けているのか。 彼らは欺きにすがりつき、帰って来ようとしない」とあります。また、9:5では「彼らはおのおの、だまし合って、真実を語らない。 偽りを語ることを舌に教え、 悪事を働き、依然として悔い改めない」と言われています。ここで「悔い改めない」と訳されているところはギリシャ語訳に従った訳であり、ヘブル語では「悪事を飽きるほどしている」という表現です。「真実と公義と正義」が全く顧みられず皆が悪事を働いている、というのです。そして、9:15で「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「見よ。わたしは、この民に、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる」という預言までします。また諸国の民に対しても、10:10では「主はまことの神、 生ける神、とこしえの王。 その怒りに地は震え、 その憤りに国々は耐えられない」と言い、神の怒りが語られます。また、出エジプトの時に与えられた契約を思い起こさせますが、11:8では「しかし彼らは聞かず、耳を傾けず、おのおの悪いかたくなな心のままに歩んだ。それで、わたしはこの契約のことばをみな、彼らに実現させた。わたしが行うように命じたのに、彼らが行わなかったからである。」と言われます。そして、11:11では「それゆえ、主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らにわざわいを下す。彼らはそれからのがれることはできない。彼らはわたしに叫ぶだろうが、わたしは彼らに聞かない。」と宣言されています。出エジプトの契約の下では神の怒りを招くのみである、というのです。13:23で「クシュ人がその皮膚を、 ひょうがその斑点を、変えることができようか。 もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、 善を行うことができるだろう。」とまで言われています。クシュ人とはエチオピア人のことで、一寸前までは、エチオピアがエジプトを占領し王朝を作っていました。要するに「肌の色や斑点をかえることなどできないだろう。あなた達が悪からぬけでることができないのもそれと同じだ」というのです。しかし、このどうしようもない状況の下にあっても、かすかな希望はもっています。14:22をお読みします。「異国のむなしい神々の中で、 大雨を降らせる者がいるでしょうか。 それとも、天が夕立を降らせるでしょうか。 私たちの神、主よ。 それは、あなたではありませんか。 私たちはあなたを待ち望みます。 あなたがこれらすべてをなさるからです」。しかし裁きの預言は変わりません。エレミヤに対する迫害は強まって行きます。彼はこれらの者への報復を祈ります。17:18では「私に追い迫る者たちが恥を見、 私が恥を見ないようにしてください。 彼らがうろたえ、 私がうろたえないようにしてください。 彼らの上にわざわいの日を来たらせ、 破れを倍にして、彼らを打ち破ってください」と嘆願しています。18:23では「主よ。あなたは、 私を殺そうとする彼らの計画を みな、ご存じです。 彼らの咎をおおわず、 彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。 彼らを、御前で打ち倒し、 あなたの御怒りの時に、彼らを罰してください」とまで祈っています。20:13-14では「私の生まれた日は、のろわれよ。 母が私を産んだその日は、 祝福されるな。/私の父に、 「あなたに男の子が生まれた」と言って伝え、 彼を大いに喜ばせた人は、のろわれよ」と叫んでいます。ここで使われている「呪われよ」は「a:rar」という動詞の受身形ですが、これは「祝福されよ」の反対語であり、“神の恵みより外されよ」ということです。聖書は新旧約とも一貫して魔術的なことには否定的であり、「呪われよ」も神の恵みとの関係で言われているのであって、魔術的、呪術的な意味合いはなしで解釈すべきです。

21-25章まではゼデキヤ王の時代のユダに対する預言です。エレミヤはバビロニアに抗することは民族の破滅を招くとして、バビロニアに降伏することを勧めます。21:8-9では「あなたは、この民に言え。 主はこう仰せられる。『見よ。わたしはあなたがたの前に、いのちの道と死の道を置く。/この町にとどまる者は、剣とききんと疫病によって死ぬが、出て、あなたがたを囲んでいるカルデヤ人にくだる者は、生きて、そのいのちは彼の分捕り物となる』と言われています。かつて、イザヤは迫りくるアッシリアの脅威に対し、アッシリア、エジプトのいずれにも組しない中立主義を勧めますが、エレミヤはもう、そのような中立主義では生き延びれられない、ということから、バビロニア支配を受け入れることを主張するのです。また捕囚を預言し、22:10では「死んだ者のために泣くな。 彼のために嘆くな。 去って行く者のために、大いに泣け。 彼は二度と、 帰って、故郷を見ることがないからだ」と言います。ユダ王国の王達の悲惨な将来が予言されます。しかし、23章に到って、「その日」のことが語られます。「その日」とは異邦人への裁きとイスラエルの救いの時であり、「主の日」「終末の日」と言われるようになる時のことです。23:3で「しかし、わたしは、わたしの群れの残りの者を、わたしが追い散らしたすべての国から集め、もとの牧場に帰らせる。彼らは多くの子を生んでふえよう」と言われています。「残りの者」というのはイザヤ書、エレミヤ書に良くみられる言葉であり、離散の民とされたイスラエルの中で、主なる神への信仰を守っている少数の人々のことです。そして23:5では「見よ。その日が来る。 －－主の御告げ－－ その日、わたしは、 ダビデに一つの正しい若枝を起こす。 彼は王となって治め、栄えて、 この国に公義と正義を行う」と言われています。「公義と正義」の行われる神の平和です。イスラエルの再興をする指導者が「若枝」として与えられる、というのです。またバビロンに捕囚され連れて行かれる人々に対し、主の言葉が与えられます。24:7です。「わたしは彼らに、わたしが主であることを知る心を与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心を尽くしてわたしに立ち返るからである」と言っています。

26-29章はエレミヤが受けた迫害などその困難について語っています。26:11ではエレミヤについて「祭司や預言者たちは、首長たちやすべての民に次のように言った。「この者は死刑に当たる。彼がこの町に対して、あなたがたが自分の耳で聞いたとおりの預言をしたからだ。」と言っています。「この者は死刑に当たる」という言葉はイエス様も投げかけられた言葉です。当時、エレミヤと同様の預言をしているウリヤという預言者が居たがエジプトに逃げたが追手によって殺害されたエピソードが記されています。エレミヤの場合は味方してくれた人物が居て助かったようです。また異邦人の王を主なる神が僕として利用する、という旧約の思想が語られています。27:6で「今、わたしは、これらすべての国をわたしのしもべ、バビロンの王ネブカデネザルの手に与え、野の獣も彼に与えて仕えさせる」と言っています。残虐さで有名なネブカデネザルが「主の僕」だと言うのです。のちにペルシャ王クロスなども「主の僕」とされ神の計画遂行の手足となります。ある意味では、イスラエルの主なる神は民族の守護神という考えを超越しているのです。しかし、直に今度はそのバビロニアの王が主なる神の裁きに直面します。

30-33章は「慰めの書」と言われています。今までの裁きの預言のなかで時々光を見せた主なる神への希望が語られる時が来ました。30章では先ほどの「その日」が繰り返し述べられます。30:7では「その日は大いなる日、比べるものもない日だ。 それはヤコブにも苦難の時だ。 しかし彼はそれから救われる」と言われています。そして30:22では「あなたがたはわたしの民となり、 わたしはあなたがたの神となる。」との救いの定型句が述べられます。そして本日の聖書箇所である31章になります。エレミヤ書のハイライトです。まず、一節で「わたしはイスラエルのすべての部族の神となり、彼らはわたしの民となる。」と言います。「すべての部族の神」です。北と南に分断されたイスラエルではなく、十二部族のイスラエルが回復される、ということです。「剣を免れて生き残った民」とか「イスラエルの残りの者」という表現が出てきます。「残りの者」の思想です。主が「残りの者」を集められるのです。31:8では「見よ。わたしは彼らを北の国から連れ出し、 地の果てから彼らを集める。 その中には目の見えない者も足のなえた者も、 妊婦も産婦も共にいる。 彼らは大集団をなして、ここに帰る」と言っています。障害者も妊婦も皆が集められます。「ここに帰る」のここはエルサレムのシオンのことですが、主なる神、と考えることもできます。「帰る」は「shu:b」であり、新約では「悔い改める」と訳される言葉が使われています。この箇所のギリシャ語は「apostrefo」であり「悔い改め」の「metanoe:o」とは異なりますが、アラム語は「tu:b」であり、この言葉は、ヘブル語の悔いる（na-ham）の意味も含んでいる言葉です。このアラム語の「tu:b」は新約聖書ではギリシャ語では「metanoe:o」即ち「悔い改める」になるのです。主なる神に立ち帰ること「shu:b」が悔い改めることなのです。この「帰る」は31章の中でも何度か繰り返し使用されます。16節ではイスラエルの民が「敵の国から帰って来る」と言われています。捕囚の民の帰還です。17節では「あなたの将来には望みがある。 －－主の御告げ－－ あなたの子らは自分の国に帰って来る」と言われています。散らされたイスラエルの子らがエルサレムに「帰って来る」のです。18節ではエフライムが主なる神に帰ることを嘆願しています。「私を帰らせてください。そうすれば帰ります」と言っています。これらすべて、「主なる神」へ立ち返ることを意味しています。

31:9には解釈が難解な箇所があります。即ち、「わたしはイスラエルの父となろう。 エフライムはわたしの長子だから」と言う部分です。創世記48章にヤコブの末息子ヨセフがその子マナセとエフライムに対し、腕を交差し右手が弟のエフライムにあてた話がでてきます。即ち、イスラエルと名付けられたヤコブは長子としての相続権を弟のエフライムに与えたことを意味します。これは父親のヨセフが仕組んだことです。そしてエフライム族はエレミヤの時代にはイスラエル民族の代表的部族でした。するとこの箇所は“主なる神はヤコブの子孫であるイスラエルの父となる。イスラエル民族の代表であるエフライムはイスラエルと呼ばれたヤコブから長子相続権を得たのだから」という意味になります。「父」と呼ばれていることは重要です。旧約の伝統では主なる神のことをこのような肉親として呼びかけるようなことは許されることではありません。後にイエス様が神に「父」と呼びかけ、私たちにもそれを許されたことが思い出されます。

31:20に少々奇妙な表現がでてきます。「エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。 それとも、喜びの子なのだろうか。 わたしは彼のことを語るたびに、 いつも必ず彼のことを思い出す。 それゆえ、わたしのはらわたは 彼のためにわななき、 わたしは彼をあわれまずにはいられない。 －－主の御告げ－－」とあります。「主の御告げ」と言う言葉がありますので、ここは主なる神の御性質を示す重大な表現ではないか、と想像できます。問題は「わたしのはらわたは 彼のためにわななき」とある部分です。主なる神の「はらわた」が「わななく」のです。この「わななく」は「ha:ma:」という動詞で音を出す、という意味です。“主なる神はイスラエルのことを思うと、おなかがわななくほどであり、憐みの心になる”というのです。この箇所は、北森喜蔵氏の「神の痛みの神学」の根拠となっている箇所です。「はらわたがわななく」というのは主なる神がイスラエルの罪を痛みをもって包み、イスラエルへの大いなる愛を示している表現だ、と言うのです。それはほぼ直接主イエスの自らを犠牲として痛みを負う愛の業に繋がっています。口語訳ではこの箇所は「私の心は彼をしたっている」という平凡な訳になっていますが、文語訳では「我が腸、彼の為に痛む」となっており、「神の痛みの神学」の理解に添った訳になっています。なお、新共同訳では「彼の故に胸は高鳴り」と訳され、フランシスコ会訳では「私のはらわたは彼を切望し」となっています。「神の痛みの神学」は神を「痛む神」として理解する考えで「包むべからざるものを徹底的に包み給う神であり、私たち人間の罪を徹底的に赦す、痛みに基礎づけられた愛の神である」とするものです。この思想は世界的にも注目され、日本の中で一世を風靡した神学思想です。カール・バルトの「神の言葉の神学」とならび「神の痛みの神学」と呼ばれました。情緒的であるとか、西田哲学の影響がある等の批判的コメントもありますが、神の愛の深みに理解をはせた考え方である、と言える、と思います。神の愛は主イエスの生涯を通して示されましたが、その生涯こそ「痛みの途」（via dolorosa）であったと北森先生は言っています。

そして本日読んでいただいた聖書箇所の31:27以降になります。まず、「見よ。その日が来る」という「その日」から始まります。同じ表現が31節でも使用されます。31:29に「その日には、彼らはもう、『父が酸いぶどうを食べたので、子どもの歯が浮く』とは言わない。/人はそれぞれ自分の咎のために死ぬ。だれでも、酸いぶどうを食べる者は歯が浮くのだ」と言われています。これは“父の咎の結果が子供に及ぶ、という格言があるが、そうではなく、自分の咎の結果が自分に発生するのだ“ということを言っています。”親の罪が子孫に及ぶのではなく自分の罪の結果は自分で負わねばならないのだ”と言っています。個人の罪と集団の罪の問題は単純には割り切れません。旧約聖書にはヨシュア記のナタンの話のように、ナタンが犯した罪の結果がイスラエル全体に及ぶとされているところや、イザヤ書53章の「主の僕」のようにイスラエルの罪がすべてこの「主の僕」に負わされる、という箇所もあります。所謂戦争責任の問題も日本国という集団の罪に対し、日本国民としての個人の責任はどう考えるべきなのか、という問題としてあります。しかし、31:29のこの箇所では父の犯した罪は子供の罪になる、という単純な罪の継承の考えに対し、これを否定したもの、と解釈すべきです。逆に、先祖の犯した罪に関し、子孫は無関係であり何の責任もない、と言っている訳でもありません。強調点が違うのです。戦争責任の問題について言えば、我々は自分たちの先祖が犯した過ちは無関係と割り切る訳にはいきません。過去の過ちは悔い改め、二度と同じ過ちを繰り返さないようにする義務があるのです。その意味で責任は逃れられません。文化継承者としての責任と言うべきものでしょう。所謂慰安婦問題について、あれは本人も同意の売春行為である、として国家責任を否定するという愚にもつかぬことを言っている人々が居ますが、罪を認め、国家としての真摯な謝罪をし、戦争における性犯罪をなくす働きを行っていくことこそ、「真実と公義と公正」に適ったことです。悔い改めは恥ずべきことではなく、事実を事実として認めない方がよほど恥ずべきことです。日本国軍隊のなした罪については日本国民は責任を問われるのは当然のことなのです。この問題については日本政府の態度は世界から馬鹿にされ軽蔑されている、と言っても言い過ぎではないでしょう。

そして31節です。「見よ。その日が来る。－－主の御告げ－－その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ」と言っています。この後に、モーセを通して与えられた所謂旧約と何が違うのかについて説明があります。32節ではイスラエルが出エジプトの時の契約を破ってしまった、と言っています。ギリシャ語訳はこれに加え神の方はその結果イスラエルを見捨てた、と付け加えられています。神の怒りの比喩的表現としては「神が見捨てる」という表現も意味あることだと思われますが、旧約も新約もどちらも神からイスラエルへの一方的な恵みの手段として与えられたものですから、人間が契約を破ったから神様も人間を見捨てる、という、双務的契約を前提にした理解は適当ではない、と思われます。33節でモーセの律法は「板に書きしるされた」ものですが、「新しい契約は「心に書き記される」と言われています。旧約は神から与えられた義務であるけれども、新しい契約は心に書き記され、人間は喜んで、自発的に従うようになる契約である、と言われています。新しい契約では、互いに愛し合う、という「愛の律法」が人の心に植え付けられ、この世が喜びに満ち、愛に包まれたものとなる、ということを言っているようです。義務的律法は揚棄されます。33節にあるように、そのような律法は教えてもらって覚える古い律法とは異なるものです。そのような愛の律法が支配する世界が実現するのは33節後半部分にあるように「わたし（神）は彼ら（イスラエル）の咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さない」とされたからです。義務的律法を遵守することによって罪から逃れ神の恵みに留まるように努める、という旧い契約ではなく、罪深い我々を何らかの方法で罪を拭い去り罪なき者としてくれる、という契約だというのです。この様なことが実際にあったらそれこそ良きおとずれ、福音でしょう。結果を知る我々は何を意味するかいう事ができますが当時のユダヤ人等イスラエルの民にとってみれば「眉唾もの」と評価されたことは当然でしょう。乃至は遠い、遠い未来の出来事とみられて当然です。

この後には38節で「その日」に神殿の修理が大々的に行われることを言っています。32章以降ではエレミヤの時代における様々な出来事について語られ、46節以降周辺の諸民族への裁きの言葉が並んでいます。最後52章で、ユダ王国最後の王ゼデキヤ以後の王国の顛末について述べられています。

考えてみると、イザヤもイスラエルの危機的状態の中で「インマヌエル」の君に関する希望を見ました。エレミヤはその約百年後にやはりユダ王国滅亡というイスラエルの言語に絶する苦難の中で「新しい契約」の幻を見ました。この預言者達が見た希望はイザヤ書53章の「主の僕」に凝縮し、人間の罪を最終的に解決する方への希望になって行くのです。それは「痛む神」の最後の最大の痛みに繋がって行くものです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のこの時をありがとうございます。エレミヤの預言から「新しい契約」のことを学びました。イザヤの預言、エレミヤの預言の中で、「新しい契約」はいかなるものかが示されてきています。イスラエルの罪への裁きの裏側に神の恵みの極致である「罪を二度と思い出さない」という神様の「痛みによる愛」の道への一方的約束が示されています。罪の中にある私たち、この世の中の現状を憐み、救いの道を今一度お示しください。そして、神の国の証人として立つ知恵と力とそして勇気をお与えください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン）